

生活体験による環境意識の形成について

田口浩継・大迫靖雄・山田 縁※

Formation of Environmental Consciousness by Experience in Life

Hirotsugu TAGUCHI, Yasuo OHSAKO, and Yukari YAMADA ※

(Received September 1, 1999)

For the purpose of seeking a new approach to both life experience for Industrial Arts education and to environmental education in elementary school, we conducted a survey concerning the pupils consciousness of life experience and environment.

Based on the analysis, Our following approach was to seek effective environmental education and Industrial Arts education.

The result clearly shows that the life experiences essential to Industrial Arts education have been dramatically reduced. There is also clear evidence that environmental education based on life experience is urgent for the facilitation of Industrial Arts education. Because of environment education's promotion, the necessity of basing it on life experience was become clear.

Key words : Industrial Arts education, life experience, environmental education, elementary school

1. はじめに

21世紀の教育について、1997年に公示された中央教育審議会第一次答申¹⁾では、環境教育や情報教育の重要性が述べられている。これらの教育は、いずれも技術科教育と関連しているといえる。このような技術科教育的な教育が注目されるようになったのは、社会経済活動の拡大や人口の増加によって資源やエネルギーの過剰消費となり、環境の持つ復元力を超え、さまざまな環境問題を引き起こし、さらに、環境汚染により人間が安全に生活することができなくなっている現状から環境保護の必要性が生じてきたことによると考えられる。

そのため、近年各学校において、環境教育に対する取り組みが進められてきている。しかしながら、教育内容は環境問題を引き起こしている原因及び解決のための知識の享受にとどまる傾向にある²⁾。環境教育を行っていく上で環境問題に対する知識を得ることももちろん重要なことである。しかし、このような知識の真の定着は児童の生活体験と密接に関係することについて、筆者の一人はすでに指摘している³⁾。したがって、環境教育の展開を議論する上で児童・生徒の環境教育に関連する生活体験の実態を明らかにすることは重要といえる。

本報では、児童の生活体験と環境に対する意識の調査を行い、技術科教育的視点に基づいて、現在どのような環境教育が必要とされるかを探り、技術科教育的意義を検証することを試みる。

※ 平成10年度熊本大学教育学部卒業

2. 調査及び調査方法

2.1 調査対象 生活体験との関わりを検討するため周囲環境、特に自然環境の異なる湯前町の緑の少年団（小学校5・6年，26名），熊本市立Y小学校（小学校5・6年，70名），熊本市立M小学校（小学校5・6年，146名），及び，生活体験の時代的变化を検討するため，水上村グリーンワーカー（平均年齢35歳，13名）を調査対象とした。

湯前町の緑の少年団は，森林の豊かな地域に在住し，自然に関わりを持つ活動を行っている。その具体的な活動としては，緑の羽根募金，記念植林，木工教室，球磨川水質調査，清掃活動，キャンプ，ホテルの餌（カワセミ）の養殖などとなっている。熊本市立Y小学校は，熊本市内の山間部で，市内の学校の中では自然と触れ合う機会に恵まれた地域に位置する。熊本市立M小学校は，市街地近郊の住宅地で，交通の便はよく，急激に市街地化が進んでいる地域に位置する。そのため校区内に新しい団地が多く設置されており，熊本市のベッドタウンとして市街地に通勤している人々が多い地域といえる。このような背景から地域における核家族化が進行していることが予想される。

水上村グリーンワーカーは，湯前町に隣接する水上村在住の林業従事者の集団である。水上村も，森林資源に恵まれた地域に位置している。グリーンワーカーのほとんどが幼少の頃から生地の山間部で生活しており，年齢差は大きいがその平均年齢は，同一地域の緑の少年団より20歳以上高齢となっている。本調査では，グリーンワーカーについては，その少年期における生活体験を調査の対象とした。

2.2 調査方法

平成10年10月から12月にかけて調査対象者に表1に示した項目に関するアンケート調査を実施した。なお，グリーンワーカーについて行ったアンケートでは，少年時代に関する設問であるため，児童を対象としたアンケートと多少の違いがあるが，内容的には同様のものとした。

表1 生活体験に関する質問事項の分類

項 目	質 問 事 項
人間関係	1. 一人で一晩以上，留守番をしたことがありますか 2. 家族の誰かを看病したことがありますか 3. 近所の子どもと遊んだことがありますか 4. 赤ちゃんをおんぶしたことがありますか
自然面	5. クモの巣づくりを見たことがありますか 6. カエルに触ったことがありますか 7. 犬や小鳥の死に出会ったことがありますか 8. 牛や馬を近くで見たことがありますか
技術面	9. 小刀やナイフを研いだことがありますか 10. アイロンをかけたことがありますか 11. 小刀やナイフで鉛筆を削ったことがありますか 12. りんごの皮をむいたことがありますか

2.3 調査内容

生活体験及び環境に対する意識を調査するため片岡⁴⁾、深谷ら⁵⁾の調査を参考として、①人間関係、技術面、自然面からみた生活体験の有無、②遊びの面からみた生活体験の有無、③遊ぶ場所からみた生活体験の有無、④環境問題に対する関心、⑤学校での環境問題に関する学習経験、⑥環境保全に関する実践の有無についてアンケート調査を実施した。なお、評点については、「あり」「ときどきあり」「なし」を各々3, 2, 1点として、項目ごとに加算してそれぞれの集団の平均値を算出した。また、「児童平均」は、緑の少年団、Y小学校、M小学校の合計得点の平均値を示す。

3. 結果及び考察

3.1 生活体験調査

a. 人間関係、自然面、技術面からみた生活体験調査

片岡が示した領域⁴⁾を参考として、人間関係、自然面、技術面に関する生活体験の調査結果を表2に示す。なお、各調査項目の質問事項は各々4つとなっており、最高点は12点となる。

表2の結果から、人間関係について平均点の高得点順に、Y小学校、緑の少年団、M小学校、グリーンワーカーとなった。また、児童平均より低い値を示したのは、M小学校、グリーンワーカーであった。この結果、緑の少年団や郊外のY小学校の児童は、人間関係が密であることを示しており、家族や地域との関わりが深いことが推定できる。これに対して、M小学校の児童の家庭は、人間関係が比較的希薄であり、その原因は地域の特性から、核家族化・少子化の傾向と関係するものと思われる。また、グリーンワーカーの結果は、少年時代のことを思い出して記載したものであることと、調査項目が時代的に女性の受け持ち分野とされていたことに関係するものと思われる。

自然関係では、平均点の高得点順に、グリーンワーカー、緑の少年団、Y小学校、M小学校となった。これらの順序は周囲環境、すなわち自然環境条件に対応しているといえる。また、緑の少年団とグリーンワーカーの値の違いは時代によることが推定され、同じ地域に住んでいながら自然面の数値が以前より減少していることが推定される。

技術面では、平均点の高得点順に、グリーンワーカー、Y小学校、緑の少年団、M小学校となり、M小学校の値が低い。このことは、自然環境との接点が希薄な地域での体験量の減少が明らかであるといえよう。また、同じ地域に居住する緑の少年団とグリーンワーカーの値を比較すると、グリーンワーカーが1.31上回っている。両者の違いは時代の違いにあり、このように、同じ地域に住んでいながら技術面の得点に差が出るのは、時代につれて技術を活用する能力が低下し

表2 生活体験に関わる得点

調査項目	調 査 対 象				
	緑の少年団	Y小学校	M小学校	児童平均	グリーンワーカー
人間関係	7.19	7.27	6.93	7.06	6.69
自然面	8.81	8.46	7.58	7.97	9.46
技術面	8.15	8.20	7.58	7.82	9.46

ていることを示しており、技術と触れ合う機会が減少したことによることが推定される。次に、山間部に位置する緑の少年団と Y 小学校では、Y 小学校が 0.05 上回っている。ただ、その差はわずかで、技術面と関係する技術科教育的体験等詳細な調査が必要といえる。

次に、自然面、技術面及び人間関係における全体平均の値を比較すると、自然面が最も高く、技術面、人間関係の順となっている。ただ、自然面と技術面の差は小さいが、人間関係の値はかなり低い。このことから、領域別では人間関係が劣っていることを示したといえる。また、自然面、技術面について、その値が最も小さいのは M 小学校で、これらは地域の状況と関係することが明らかといえよう。このことから、技術面は自然面と関係があり、自然との触れ合いが多いほど技術面も高くなっていることが推定できる。

以上、人間関係、自然面、技術面から生活体験を分析したが、この 3 つの項目は、それぞれ密接な関係にあることが明らかになった。ただ、調査対象集団間では人間関係の値の差が最も小さくなっている。このことから、人間関係は、自然環境の違いに関係なく児童の生活体験が平均的に低下していることによると考えられる。

b. 遊びの面からみた生活体験調査

子ども達が経験した遊びを片岡⁴⁾の分類を参考として、A：集団のルールと体を使った遊び(おにごっこ、花いちもんめ、馬とび)、B：周りの道具を使った遊び(缶けり、ハンカチ落とし、大縄跳び)、C：手作りの遊び道具を使った遊び(竹馬、竹とんぼ、チャンバラ)、D：買った遊び道具を使った遊び(ビー玉、すごろく、トランプ)、E：自然を利用した遊び(木登り、笹舟、秘密基地づくり)、F：電子器具を使った遊び(テレビ、テレビゲーム、携帯型ゲーム機)の 6 つに分類し、各集団における生活体験を分析する。選択された遊びを一つにつき 1 点(各遊び群の最高得点は 3 点)とし、その得点合計を求め、各集団ごとの平均値を算出し、高得点順に並べたものを表 3 に示す。なお、括弧内の数値は平均得点を示す。

表 3 の結果から、各児童集団に共通して、F の遊びの順位が高いことを示している。このことから、F の遊びは、地域特性に関係なくいずれの地域でも好まれているといえよう。

また、各々の集団の合計平均より低い値を示した遊びは、緑の少年団：B・C、Y 小学校：E・A、M 小学校：A・E となっている。このことから、各々の児童を取りまく地域の特徴がみられ、自然的環境が乏しい地域ほど E の遊びが少なくなっている。また、E の遊びの平均得点に注目すると、一番小さい得点を示したのは、M 小学校であった。M 小学校は熊本の市街中心部に 3 校中最も近く、調査対象集団中最も都市化が進んでいる地域に位置している。また、地域の自然環境が類似した Y 小学校と緑の少年団の E の遊びの平均得点が等しい点を考慮すると、E の遊びは住

表 3 遊びからみた生活体験

調査対象	高い値を示した順位 (平均得点)					
	①	②	③	④	⑤	⑥
緑の少年団	F(2.65)	A(2.35)	D(2.23)	E(2.15)	B,C(1.69)	—
Y 小学校	B,C(2.94)	—	F(2.83)	D(2.8)	E(2.46)	A(2.27)
M 小学校	F(2.83)	B,C(2.75)	—	D(2.58)	A(2.49)	E(2.01)
グリーンワーカー	E(1.62)	A(1.46)	D(1.31)	F(1.3)	B,C(1.08)	—
児童平均	F(2.81)	B,C(2.69)	—	D(2.6)	A(2.55)	E(2.16)

A：集団のルールと体、B：周りの道具、C：手作りの遊び道具、D：買った遊び道具、E：自然の利用、F：電子器具

んでいる地域の自然環境と密接に関係しているといえる。

児童平均の結果は、高得点順に F, B 及び C, D, A, E となった。また、児童平均より高い値を示したのは、F, B 及び C であった。このことから、現在の主な児童の遊びは、F, B 及び C といえる。これらの遊びは、すでに完成した道具や器具を使用し、決定されたルールに従った遊びといえる。それに対して、児童平均で最も低い値を示した E は、自ら考え、創造する技術科教育と関連した遊びといえる。

次に、緑の少年団とグリーンワーカーを比較すると、F と E の順位に違いがみられる。この結果は、遊びの平均化による地域差の消滅が時代によって進展したことが示されたといえる。また、E が緑の少年団に好まれなくなったことは、身体を動かし、自然を利用した遊びの衰退であり、21 世紀に必要とされる社会に適応した体験の必要性⁵⁾の根拠を示しているといえよう。

以上、遊びの面からみた生活体験を分析したが、その結果、テレビ、テレビゲーム、携帯型ゲーム機等の遊びが急激に増加し、遊びの種類に地域差がなくなる傾向が進んでいるといえる。この傾向は、子どもの遊びにおける行動範囲や友人関係の縮小につながると推定でき、片岡や深谷らが指摘している「遊び」へのバイタリティの消失、仲間と関わる欲求の減退へ連なるといえる⁴⁾。さらに、同年代のみによる「遊び」や「一人遊び」は、子ども社会における社会性の養成がなされない危険性をはらんでいる。また、経済性を伴う「遊び」は、大人の経済力を頼りにしたものであり、大人社会の支配を受けることによるフラストレーションの高まりも指摘されている⁶⁾。

c. 遊ぶ場所からみた生活体験調査

各調査集団に対して、遊ぶ場所（学校、公園、家の庭、家の中、山、川）の調査を行った。なお、回答は、複数選択可とし、「その他の場所」については自由記述とした。各々の遊ぶ場所の割合を表 4 に示す。

緑の少年団とグリーンワーカーを比較すると、グリーンワーカーの山や川で遊ぶ割合の高さが顕著であり、最近これらの地域での遊びが減少したことを示している。また、緑の少年団の場合、外で遊ぶにしても、家の庭といった狭い範囲であることが示されている。

次に、緑の少年団、Y 小学校、M 小学校についてみてみると、いずれの集団も山と川で遊ぶ機会が少ない。ただ、山と川に注目すると、高い順から Y 小学校、緑の少年団、M 小学校となっており、自然環境と離れるにしたがい山や川との接触が希薄になっていることが明らかとなっている。

表 4 遊びに利用する場所

(%)

調査項目	調 査 対 象				
	緑の少年団	Y 小学校	M 小学校	児童平均	グリーンワーカー
学校	65.4	82.9	59.6	66.9	53.8
公園	19.2	31.4	83.6	61.6	15.4
家の庭	69.2	74.3	24.0	43.4	69.2
家の中	69.2	90.0	83.6	83.9	23.1
山	19.2	31.4	9.6	16.9	61.5
川	19.2	28.6	8.9	15.7	61.5
その他	0	12.8	8.9	14.8	0

3.2 環境に対する意識の実態調査

a. 学校での環境問題に関する学習

学校で環境問題について学習したことがあるかについて調査を行った結果、Y小学校(100%)、緑の少年団(92.3%)、M小学校(87.0%)、グリーンワーカー(15.4%)の順に高い値を示した。グリーンワーカーの値は、児童平均(91.3%)を大きく下回っている。現在、小学校教育の中で環境教育に関係する内容は、理科、社会科において3~6年生で指導されている。ただ、指導内容が、明確に環境問題として認識されていない場合が若干みられるが、一応の学習効果が示されているといえる。これに対して、グリーンワーカーの結果は、20年以上前の学校教育では明確な指導がなされていなかったことを示しているといえる。ただ、緑の少年団、M小学校については、学校で習っていないと答えた児童が少数いた。環境については、現在全ての学校で取り組まれているはずであるが、このような結果が出たことは、環境問題についての学習が、記憶に残っていないと考えられる。学校側は、環境問題について効果的学習の開発が必要なことを示しているといえる。

次に、環境問題を学習した教科について調査を行った結果を表5に示す。

表5の結果から、児童平均をみると、高得点順に、社会、国語、理科、道徳、家庭科、生活、クラブ、体育及び音楽、図工及び算数となっている。このことから、緑の少年団、Y小学校、M小学校では、国語、社会、理科の教科において環境教育がなされていると認識している児童が多い。これらの教科についてみると、国語に関しては、単元の内容に環境問題が取り扱われており、また、社会や理科では環境に関する内容を指導することが教科書及び学習指導要領⁷⁾⁸⁾に示されている。しかし、理科では学習したとする認識が低い結果を示している。これは、理科の場合、自然現象の指導にとどまり、環境教育に結びついた指導がなされていないことが推定される。道徳では、緑の少年団を除く集団の児童の約1~2割が環境教育を学習したと回答している。これに対して、グリーンワーカーでは、約2/3が学習したと回答している。この結果は、道徳教育において、約20年以前に環境を取り上げていることを示している。道徳教育でこのような指導を行うことは、環境問題を指導し、定着させるために重要といえる。今後、環境教育のあり方として考える必要がある。

表5 環境問題を学習した教科答

(%)

回答項目	調 査 対 象				
	緑の少年団	Y小学校	M小学校	児童平均	グリーンワーカー
生活	0	4.3	8.7	6.1	0
国語	62.5	92.9	62.2	68.8	0
算数	0	1.4	0.8	0.9	0
理科	4.2	38.6	18.9	22.5	0
社会	95.8	88.6	75.6	78.4	33.3
図工	0	1.4	0.8	0.9	0
家庭科	0	18.6	6.3	9.1	0
体育	0	1.4	1.6	1.3	0
音楽	0	1.4	1.6	1.3	0
道徳	0	12.9	18.1	13.9	66.7
クラブ	0	2.9	1.6	1.7	0

b. 環境に対する意識について

「環境問題という言葉聞いたことがあるか」に対して得点の高い順に、緑の少年団 (100%)、Y 小学校 (100%)、M 小学校 (96.6%)、グリーンワーカー (23.1%) となった。なお、児童の平均値は 97.9%と高い割合を示している。このことは、前項で示したように、学校教育での環境教育と関係しているといえる。このことから、学校教育や日常生活の中で環境問題という言葉に接していることを示している。これに対して、グリーンワーカーは、小学校時代に環境問題という言葉聞いたことがなかったと答えた人が大半であった。これらの結果から、少なくとも 20 年以前には環境問題が顕著でなく、環境問題が児童の周辺で話題となりだしたのは最近であることが推定される。

次に、環境問題に関わる項目を 9 項目に分類し、最も興味を持った項目について調査した結果を表 6 に示す。

表 6 環境問題に対する興味

(%)

調査項目	調 査 対 象				
	緑の少年団	Y 小学校	M 小学校	児童平均	グリーンワーカー
①	3.8	21.4	31.5	25.6	15.4
②	19.2	1.4	4.8	5.4	38.5
③	3.8	0	2.7	2.1	0
④	3.8	4.3	4.1	4.1	7.7
⑤	15.4	8.6	9.6	9.9	15.4
⑥	19.2	27.1	13.0	17.8	0
⑦	7.7	10.0	14.4	12.4	0
⑧	11.5	24.3	15.1	17.4	15.4
⑨	15.4	2.9	4.1	5.0	0

①：自然の減少，②：川の汚染，③：海の汚染，④：空気の汚染，⑤：ゴミの増加

⑥：野生動物の減少，⑦：地球温暖化，⑧：オゾン層の破壊，⑨：酸性雨

児童平均をみると、①の割合が圧倒的に高いことを示している。①の項目で児童平均より高い値を示したのは、M 小学校であった。Y 小学校でも、①自然の減少の項目に対して興味はあるが、M 小学校より低い値を示した。また、緑の少年団、グリーンワーカーともに、M 小学校、Y 小学校に比べて、低い値を示した。このことから、住んでいる地域が自然に多く囲まれているほど、自然の減少に関心がないことを示している。

次に、児童平均が高い値を示した⑥の項目についてみると、M 小学校が児童平均より低い割合を示すが、緑の少年団、Y 小学校ともに高い割合を示した。それに対してグリーンワーカーは、全く関心がなく、むしろ逆に野生動物が増えて困るといった回答があった。グリーンワーカーの活躍している地域では、保護された鹿が増え、食物不足のため、樹木に被害が出ていることから、このような結果になったといえる。このような結果は、環境教育において、一般的に示された問題点が地域によってあてはまらないことを示しており、地域に定着した環境教育のあり方を示しているといえる。

⑦の項目については、全集団が関心を持っていることが示された。このことは最近の、京都における地球温暖化会議、ニュースや新聞などの情報によるものと思われる。

また、児童平均から明らかなように、全集団において、③の項目が一番低い値を示した。これ

は、調査対象地域がいずれも海との関連が比較的低いことに関係するように思われる。

c. 環境保全について

身近な生活の中での、環境保全のための活動体験の有無について調査を行った結果、緑の少年団 (92.3%)、Y 小学校 (95.7%)、M 小学校 (87.8%)、グリーンワーカー (38.5%) の順に高い値を示した。なお、児童平均は 85.1% と高い割合を示した。

以上の結果より、緑の少年団、Y 小学校では、「なし」の回答割合に顕著な違いはみられないが、これと比較して、M 小学校では高い割合を示している。また、グリーンワーカーについては、「なし」の回答が圧倒的に多いことを示している。グリーンワーカーは、植林や山の手入れなどを仕事内容としており、環境保全に大きく関わっている。すなわち、本来森林保護は環境保全の重要な部分を占めている。しかし、これらの仕事に従事するグリーンワーカーに、「なし」の回答が多いことは、その仕事は、環境保全に貢献しているという認識が少ないことと、環境保全の意味が理解できていないのいずれかといえよう。

次に、環境保全に対する具体的内容について調査した結果を、表 7 に示す。身近な生活でできる環境保全の内容を、①ゴミは燃える物、燃えない物に分けている、②生ゴミを燃やさずに土に返している、③新聞紙や牛乳パック、空きビン、空き缶をリサイクルしている、④歯磨きの時、水を出しっぱなしにしない、⑤ノートや鉛筆は最後まで使う、⑥使わない部屋の電気は消している、⑦川をきれいにする、⑧山の手入れをする、⑨紙や水などの無駄遣いをしない、⑩緑を増やす、⑪合成洗剤をあまり使わないの 11 項目に絞り、実施したことのある項目を複数選択により調査した。⑫ゴミ拾いをするという項目は、その他の欄に自由記述により出されたものである。

児童平均で、高い値を示したものを高い割合順に示すと、⑥④①⑤となる。④⑤⑥の項目は、日常生活の中で日常的に行われる項目となっている。したがって、個人個人が気をつけていくべきことで環境保全の意識を持っている場合、容易に実践可能にも関わらず、わずかではあるが実行していない児童がいることが明らかになった。このことは、今後、具体的な環境教育の定着ということで大きな課題といえる。⑨の項目も日常的な行為にも関わらず低い実践度を示している。このような結果は、環境教育の必要性について今後のあり方を検討する必要があることを示した

表 7 環境保護のための各項目の実践度 (%)

回答項目	調 査 対 象				
	緑の少年団	Y 小学校	M 小学校	児童の平均	グリーンワーカー
①	50.0	71.6	71.3	68.9	100.0
②	25.0	34.3	13.9	21.8	80.0
③	54.2	35.8	56.5	49.5	0
④	50.0	79.1	81.7	77.2	60.0
⑤	53.3	55.2	68.7	60.2	0
⑥	62.5	89.6	86.1	84.5	60.0
⑦	12.5	17.9	10.4	13.1	40.0
⑧	4.2	14.9	0.9	5.8	80.0
⑨	12.5	46.3	55.7	47.6	20.0
⑩	16.7	35.6	31.3	31.1	60.0
⑪	8.3	13.4	17.4	15.0	20.0
⑫	8.3	14.9	6.1	9.2	0

といえよう。①の項目については、グリーンワーカーの全てが実践していると回答している。このような結果は、ゴミとダイオキシンなど環境破壊の関係等の問題提起が関係していると思われる。これに対して、児童の平均は約7割となっており、M小学校、Y小学校が、児童平均より若干高い値を示し、緑の少年団は、児童平均よりやや低い値を示した。これは、ゴミの分別に関する規制のあり方と関係することが考えられ、市内では、その規制が厳しく、山間部ではゆるやかなことが、子ども達のゴミの分別の意識に影響したことが考えられる。

次に、低い値を示したのは、低い順に⑧⑫⑦⑪の項目となっている。⑧⑦についてみるといずれの項目も、ボランティア活動などの活動を通しての機会が主となっていると推定される。そのため低い値を示したと思われるが、極端に低い値を示していることから、ボランティア活動や子ども会活動などにこのような活動をもっと取り入れる必要があると思われる。また、⑧の項目についてみれば、グリーンワーカーが一番高い値を示しているのに対し、緑の少年団は、著しく低い値を示した。このことから、森林が豊かな地域で、しかも緑の少年団という森林と関係する活動を行う集団で、一応山の手入れに従事しているにも関わらず、このような結果が示されたことは、前述したように山の手入れが環境保護につながることを認識していないことを示しているといえる。このことは、⑩の項目についても同様である。このことから、森林が豊富な地域の特性を生かしながら環境教育をしていくことの重要性を示しているといえる。また、環境保護の意味についての学習も必要なことを示しているといえよう。

②についても、児童平均が低い値を示している。その中でも、最も低い値を示したのは、M小学校であった。②の作業については、生ゴミを土に返す場所が必要になってくるため、都市部での体験が困難であり、この結果は、体験の欠如と関係することが推定できる。

これに対して、③についてみると、M小学校が最も高い値を示している。しかし、空き缶が「リサイクル」されていることは、他のデータからほとんどの人が認識していることが明らかであった。しかしながら、実生活において「リサイクル」の実践活動に結びついていないことが示されたといえる。

4. おわりに

4.1 児童の生活体験 児童の生活体験について、地域環境の違いや時代の違いによる変化について検討した結果、以下のようなことが明らかとなった。

- (1) 自然面及び技術面に関する生活体験は、自然環境の豊かさと関係することが明らかとなった。
- (2) 人間関係に関する生活体験は、自然環境の違いに関係なく、児童一般に低下していることが明らかになった。
- (3) 同じ地域に住むグリーンワーカーと緑の少年団を比較した場合、明らかに緑の少年団の方が自然面、技術面の経験が少なくなり、時代によって体験量が減少していることが明らかとなった。
- (4) 児童の「遊び」も、いずれの地域でもテレビやテレビゲームなどの遊びが増え、生活環境の違いに関係なく児童の遊びの種類が平均化していることが明らかになった。
- (5) 遊びの種類の変化から、集団的体験が衰退し、疑似体験や間接体験が多くなっていることが明らかとなった。

以上の結果から、学校教育の実施には、児童や地域の実態を十分把握し、学校教育で行うこと

はもとより、家庭や地域社会の相互の連携のもとに、児童の体験活動の機会を一層豊かにし、「人間らしく生きていくための知恵」や「実践力」を豊かに身につけるよう指導していく必要があるといえる。

4.2 児童の環境に対する意識

生活体験と環境教育について、以下のことが明らかとなった。

- (1) 環境問題という言葉は、ほとんどの児童が知っていることが明らかになった。また、グリーンワーカーの調査結果との比較から、学校教育における環境教育が浸透していることが明らかとなった。
- (2) 環境問題の具体的認識は、身の回りに起こっている問題と関係することが明らかとなった。すなわち、都市部に位置するM小学校は、特に自然の減少に興味を示した。しかし、自然が豊かな地域である緑の少年団では、自然の減少に興味を示している児童は少なかった。
- (3) 日常生活における環境保全に対する取り組みは、自然環境に恵まれた集団で活発であることが明らかとなった。
- (4) 環境保全に対する具体的な事項については、地域的特性がみられ、地域の実態と連結した環境教育の必要性が明らかとなった。

以上のことから、自然環境の保護に関する教育については、自然の減少が始まる前に、その地域に住む児童に現在の状況などを教育するなど地域の状況に応じた教育が必要といえる。また、学校教育で環境教育を進めていく際に、地域の実状に応じ、自然環境に触れ合う機会や体験活動などを多く取り入れるように考慮する必要があるといえる。

参 考 文 献

- 1) 文部省：第15期中央教育審議会第一次答申，1997。
- 2) 高知大学環境教育研究会：児童・生徒の環境と環境学習に関する意識調査，1992。
- 3) 大迫靖雄他：児童の生活体験における技術科教育的要素について，熊本大学教育学部実践研究，No. 9，13-21（1992）。
- 4) 片岡徳雄：子どもの感性を育む，NHKブックス603，NHK，1990。
- 5) 深谷昌志，深谷和子：第34回日本教育社会学会資料，1982。
- 6) 深谷昌志，深谷和子：遊びと勉強—子どもはどう変わったか，中央公論，1976。
- 7) 文部省：小学校学習指導書 社会編，学校図書，1989。
- 8) 文部省：小学校学習指導書 理科編，教育出版，1989。